

# 時代の証言者

婦人政策課にいた35歳の時、次女が生まれました。「子どもが生まれて良かった」と先輩に言われ、思い当たる節がありました。部下に優しくなりました。めったに怒らない私ですが、30代半ばまでは結構、後輩を叱っていた。でもね、娘たちを見て思ったんです。住んでいた公務員宿舍の庭で育てた花を見て、長女は花の色をまず言い、次女は花の数のことを言った。同じ環境で育った娘たちでも違うのだから、人によって感じ方や行動が違うのは当たり前。思い通りに部下が動いてくれないとストレスをためるより、個性

## 19 厚子 村木 官次郎の冤罪

を受け入れ、生かした方がいいなど。包容力がついたのかもしれない。

41歳の時、課長になりました。まず思ったのは、家を買わなきゃということ。省庁の課長はそれなりに責任が重いポストだし、組織の意向と意見が対立した時、辞めたいと思うかもしれない。その時、宿舍を出るのに時間がかかるのはいかにもまずい。家を探し、数年後に引っ越しました。課長としての最初の職場は障害者雇用対策課。正直、戸惑いました。すぐ「差別的」と言われるのではないかと、障害者団体とどう付き合えばいいのか。手足が縮むような感じでした。障害者を雇用している会社の社長に会うと、「障害のあるなしは関係ない。従業員

# 障害者分野 豊かな世界



村木さんが今使っている名刺。障害のある人のアート作品を選んで名刺を注文することが、障害者の就労支援につながっている

員の良いところを見つけ、いかにそれを生かして貢献してもらえるかを考えている」と言われました。障害者ではなく労働者として能力開発を考えているのです。それなら今までやってきた労働政策と同じです。怖さの呪縛が解けました。現場に行くこと「常識」が覆されることもたびたびでした。知的障害の人たちが難しい漢字の打ち込み作業

をしているのを見た時は目が点に。漢字を図形として認識しているのだと教わりました。こだわりの強い自閉症の方が、非常に精度の高い顕微鏡作りに携わっているのも見ました。障害者の雇用は女性の雇用問題と似ているとも思いました。誤解や偏見により、両者とも雇用市場で能力が十分生かされていない。「女には無理」の女の部分に「障

害者」の文字がすっぽり入る。ただし、遅れている分野だけに、政策がはまると驚くほど成果が出るという経験もしました。

▲金融危機を受けた雇用対策の一環として、労働省は1999年、障害者のトライアル雇用を開始。1か月の実習と3か月の仮雇用後、企業と障害者双方が望めば本採用になった▼

3か月でクビを切る制度を作るとは何事かというお叱りもありましたが、「3か月間、企業で働いた実績は障害者の勲章になる。彼らの働きぶりを見れば雇い続ける企業は多いはず」という現場の声に後押しされました。実際、大半が継続雇用となりました。

障害のある人はもちろん、支援している人もみな個性的で、熱くて、面白い。障害者の分野は驚くほど豊かな世界と知りました。

(編集委員 猪熊律子)